

博物館でコウモリ調査

奥村 みほ子

当館に、コウモリが住みついていることがわかったのは、今年3月のことでした。仕事が終わり、車で帰ろうと駐車場に出たとき、パキッパキッと金属がはぜるような音が建物の上から聞こえました。何の音かわからず、あたりを見回していると、屋上と壁面の間のパネルの間から小さな丸い塊がニュッと出て、ポロッと落ちました。落ちた瞬間、翼を広げて飛んで行きました。コウモリでした。あつげにとられて見ていると、次々と出て来ては、翼を広げて飛んで行きました。この日は、30頭ほどの個体が飛んで行きました。最初のパキッパキッという音は、このコウモリたちの鳴き声だったのかもしれませんが。

日本から知られるコウモリ目は、5科37種あり、この内大部分が体の小さな小型コウモリで、昆虫を食べます。小型コウモリの分布や生態は徐々に明らかになりつつありますが、人工建造物の利用に関する報告が散見されるくらいで、詳細な生態の観察や継続的な報告は非常に少ないのが現状です。

今年3月に当館で見つけられた、コウモリたちのねぐらは当博物館西側にある駐車場沿い(西向き)と2階テラス沿い(北向き)の2か所でした。そこで、このコウモリの小集団が当博物館をねぐらとしてどのように利用しているのかを明らかにしようと、夕方に、目視とビデオカメラを用いて観察を行い、ねぐらを飛び出す(出巢)コウモリの頭数を数えました。また、コウモリの鳴き声を人の可聴音に変換する機械(バット・ディテクター)を使い、ねぐらを出巢するコウモリの声の周波数を測りました。

調査した結果、40頭前後のコウモリの出巢が確認でき、出巢した個体は皆、近くを流れる荒川の方へ飛んで行きました。この中にアブラコウモリが数頭いることが確認できましたが、大部分は別の種類でした。当館を利用していた大勢のコウモリの種は、目視や写真およびビデオの映像により確認した大

きさや、鳴き声の周波数が約20kHzであったことなどから、ヒナコウモリという種類であろうと推測されました。このヒナコウモリたちは天気の良い夕方には決まって、夕暮れ時に出巢して行きました。

ところが、5月15日以降、2か所のねぐらのヒナコウモリたちで、出巢する個体が1頭も観察されなくなりました。一斉に集団が解散したか移動したと考えられましたが、解散なのか移動なのか、また、行き先もわかりませんでした。この現象は、これまで他の場所で行われた研究から判明しているヒナコウモリの生態、すなわち冬季に集団越冬し、翌年の5月中旬頃にはこの集団が解散する、といった知見とも合致する現象でした。ヒナコウモリの越冬集団の観察例は少なく、しかも人工建造物の利用は珍しいため、当博物館は越冬するためのねぐらとして、貴重な場所であると考えられました。

同じ頃、寄居にある川の博物館でもヒナコウモリやアブラコウモリがねぐらとして建物を利用していることがわかりました。そして、川の博物館でも、ヒナコウモリは5月18日に大部分が、いなくなりました。

今回の研究では、ヒナコウモリが5月中旬に博物館から離れ、どこに行くのかわからなかったため、今後は、その行方を追えるように研究を進めていきたいと思えます。



出巢直後のヒナコウモリ (撮影: 碓井 徹)
(おくむら みほ子・学芸員)